

教職実践演習（幼・小）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 田 中 崇 教

はじめに

本報告は、2018年度「教職実践演習（幼・小）（以下、本科目）」（幼児教育コース対象）の概要とその省察を記したものである。本科目は、初等教育学科幼児教育コースの4年次生を対象に、教職・保育士養成課程の履修全体を通じて身につけるべき資質能力の涵養を様々なテーマ（内容）や形式（方法）で実施し、保育・教育の専門職者として求められる事項（①使命感・責任感・教育的愛情、②社会性や対人関係能力、③幼児・保護者理解、④保育指導力）の補完・向上をねらいとしている。例年、「学生の確かな成長を実現するための効率的効果的な指導」に基づく授業内容の構成について、前年度までの省察および当該年度受講生の状況を踏まえながら関係教員等（幼児教育コース所属教員等）と密に協議を重ねてきた。

前年度の実施にあたって関係教員らと確認した重点項目は、①今までに実施した教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳおよび保育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでの学びと自らの改善点（専門職者として向上するための課題）を学生が個々で明確にすること、②保育実践上の基礎技能や現在の保育・子育てをめぐる現況理解を補完すること、この二点であった。そこには、現時点での能力とその向上にむけた必要性を学生ら自身が個々に痛感するとともに、残された半年間の在学期間で専門職者としての資質向上に学生自ら取り組むことが指導上の目論みがあった。ゆえに、今年度においては授業時間内外で教員も巻き込みながら学生同士が話し合い・高めあうような雰囲気の醸成が工夫として必要であることを共有し、授業を実施した。

1 実施計画

全15回の授業は次の通りであった。事前事後学修も含め、予定通りに実施された。

- | | |
|------|-------------------------------------|
| 第1回 | オリエンテーション—履修カルテ等の確認 |
| 第2回 | 実習の振り返り—今後の取り組みに関する演習 |
| 第3回 | 子育て支援に関する演習—支援者の立場から |
| 第4回 | 模擬保育および検討会①—家族・地域、社会ルール、健康安全など |
| 第5回 | 模擬保育および検討会②—季節や年中行事など |
| 第6回 | 現任保育者による講話・意見交換①—幼稚園教諭 |
| 第7回 | 現任保育者による講話・意見交換②—保育士 |
| 第8回 | 子育て支援・保育に関する研修会等での実地演習 |
| 第9回 | 保護者理解に関する演習—保育者勤務経験のある育児中の母親との意見交換会 |
| 第10回 | 幼稚園・保育所等における実地演習①—子ども理解を中心に |
| 第11回 | 幼稚園・保育所等における実地演習②—保育者の業務理解を中心に |
| 第12回 | 幼稚園・保育所等における実地演習③—環境構成の分析を中心に |
| 第13回 | 幼稚園・保育所等における実地演習④—設定保育の分析を中心に |
| 第14回 | 保育実践の事例分析に関する演習—子ども理解に基づいて |
| 第15回 | 保育・子育て支援の現況理解と今後の動向を踏まえた総括 |

2 2018年度実施の特徴—保育実践力の向上をめざした継続的取り組みの補完—

本科目は、2013年度に開講されて以降、段階的に改善の手が加えられてきた。これまでの継続的な取り組みに加え、今年度も授業運営計画立案の際には受講生（幼児教育コース4年次生：48名）がこれまでに実施してきた幼稚園教育実習や保育実習等での評価・コメントを手がかりに、本科目での補完点と重視すべき方向性を確認した。これらは次の二点に整理される。

一点目は、保育職・教職の専門的視点に基づく子ども・子育て理解の深化である。受講生の学年から、2年次の科目「幼児教育学演習Ⅱ」（演習：卒業必修科目）において広島文教女子大学附属幼稚園（以下、附属幼稚園）での実施演習が新たに授業内容として設けられた（2016年度）。2年次前期開講科目「教育実習Ⅶ」で学生らは附属幼稚園で園児らと積極的に関わったり、幼稚園教諭による設定保育などを観察したりすることにより、子ども理解や園の業務理解を実践的に深めている。ところが、2年次後期には、そうした経験の機会が乏しく、学生の自主的な幼稚園・保育所等での保育ボランティア活動程度にとどまっていた。そこで、「幼児教育学演習Ⅱ」において、附属幼稚園にご理解いただき、学生が当該授業時間時間帯に園を訪問し、園児とのふれあいや設定保育等を観察する実地演習の機会を新たに設定した。2年次後期においても実地演習を設定することにより、学生は子どもの姿や設定保育の在り様を春夏期から秋冬期にかけて連続的に捉えることができ、長期的な視点で子どもらの成長発達や指導計画の推移を把握することができる。従来から推奨してきた自主的な幼稚園・保育所等での保育ボランティア活動と併せて、いわゆる実地経験を重ねてきた。この経緯に基づき、受講生らには実地経験の十分さを実感している様子も垣間見られた。しかし一方で、受講生らが取り組んだ教育実習や保育実習での園からの評価コメントには「子ども理解や保育内容・方法の理解のためにもさらに実地での経験を積んで欲しい」といった記載内容が少なくない。こうした自己認識と園との評価との乖離がみられることは決して看過することはできない。ここに「保育実践力」の向上を計画的実践的に目論む本科目の意義を見出した。

まず、「実習の振り返り—今後の取り組み関する演習」を通じて、受講生は保育・教職専門性の向上にあたっての自己の課題と成長可能性を確認した。続いて、2回にわたる「模擬保育および検討会」を通じて実際に模擬保育を構想・実践することにより、現時点における自身の設定保育に関する力量とその向上のためのテーマを確認した。これらの自己認識活動において様々な疑問や不安が受講生自身の中に必ず浮かび上がってくる。そうした疑問や不安を解消するための手がかりを得る機会として「子育て支援に関する演習—支援者の立場から」、「現任保育者による講話・意見交換①—幼稚園教諭」、「現任保育者による講話・意見交換②」、「保護者理解に関する演習—保育者勤務経験のある育児中の母親との意見交換会」を実施した。学生は、現役保育者や母親らと漠然と談話し交流するのではなく、保育業務や子育てに関する「何らかのテーマ」を個々に設定して談話や交流に臨むため、理解の深化が見込まれた。

こうした振り返り（学び）に基づき、受講生は幼稚園・保育所等（認定こども園などを含む）にて実地調査を行い、それぞれの現場で保育実践力を磨いていったのである。加えるならば、実地で積み上げた学びを「保育実践の事例分析に関する演習」にて振り返った。このように、本科目は一瞥すると各回がそれぞれ独立したテーマによって構成されているようにみえるものの、有機的に連動した教育的意図を設定しているのである。

二点目は、「保育・子育て支援の現況理解と今後の動向」の実践的理解の促進である。例年、保育や子育て支援の現況と今後の動向について、理論的に俯瞰する講義・演習を行ってきたが、専門職保育者の視点に基づく実践的な講座は必ずしも十分とはいえず、本科目における課題の一つであった。そこで、今年度は初等教育機関にて豊富な実務経験を有する講師（本学初等教育学科教員）が、実践事例に基づき現況と今後について解説を行った。幼小連携（異校種間連携）といった先進的なテーマ

が実際に展開されていく過程について、また実際に起こった実践者（保育者および小学校教諭）や子どもたちの葛藤や躓きを具体的な経験談から窺い知ることは、受講生自身のイメージを鮮明にさせる資料として有効であった。

先述した幼稚園・保育所等での実地調査では触れる機会が少ない事例であったことは、当該回の授業シートにおける受講生の記述からも確認できる。在学期間中に補完しにくい学びを提供することは本科目の役割の一つであり、豊饒な教育効果を生み出すためにも欠かすことのできない取り組みであった。

3 成果と授業改善に向けた課題

今年度テーマに掲げた「保育実践力の向上」が有意義に図られるために、実は「実地への円滑かつ自発的積極的な接近」、「在学時における自己理解の深化」が重要な条件であった。本科目が現在の体制になった当初、本科目で設定した実地調査や保育補助ボランティアといった実地の赴くことに抵抗や不安を大なり小なり示す学生がほとんどであった。もちろん、実地へ赴いた後や卒後の彼女らのコメントからは、「重要な学びが得られた」、「実地に赴くことは積極的に行ったほうがよい（後輩たちにぜひ勧めたい）」と肯定的な評価が伺えた。問題は、実地に赴き、保育者や子どもらと実習以外の場で関わることを必要以上に難関な「聖域」と捉える心情であった。そこで、一昨年度からの新たな指導体制下となった際、先述のような実地への接近を多様に設定した。

下級学年時から複数年にわたり繰り返し実地に赴くことで、実地での経験を「(実り多き学びが得られるために) 自明のこと」と捉える雰囲気は4年次はいうまでもなく下級学年の学生間にも浸透した。このことは、実地調査や保育補助ボランティア自体に抵抗なく取り組む受講生の姿からも伺えた。一昨年からの雰囲気とは明確に異なるものであった。先述の様々な講義・演習による在学時における自己理解の深化も含め、「授業計画⇒実践⇒振り返り⇒改善」の手立てを通じて継続的に取り組んできた萌芽の一つであるとともに、他の実習科目及び「幼児教育学演習」との連携・系統化による成果とみることができるだろう。併せて、昨年度から積極的に導入している受講生による演習（授業）運営、下級学年次生の参加・補助等は、専門職保育者としての成長に連なる学びであったといえる。

最後に課題として、専門職保育者かつ社会人としての自己理解を深めるためのさらなる工夫があげられる。専門性に基づく知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力・人間性の向上にあたり、受講生（場合によっては大学教員も一緒に）自身の生き方や倫理を問う思考をテーマとした講義・演習の検討は今後必要である。幼児期の教育を行う実地では、それこそ新領域に基づく様々な実践が繰り広げられ、従来自明視されてきた教育実践観の問い直しが発火している。これらの動向を踏まえつつ、授業内容の改善に取り組む。

以上のような今年度の省察（成果と課題の検討）に基づき、次年度以降も専門職保育者を目ざす受講生にとって実りある学修になるための授業改善を教員のみならず学生らとともに進めていきたい。

謝辞

今年度本科目を実施するにあたり、多大なるご支援ご尽力を賜った幼児教育コース卒業生有志、さらには心理学科、学園統括部地域連携室、そして初等教育学科幼児教育コース2,3年次生有志に謹んでお礼申し上げます。